

「ガリレオの娘、修道女マリア・チェレステ」

最近、「ガリレオの娘」（デーヴァ・ソベル著、田中克彦訳、DHC 出版）という本を読みました。著者はジャーナリストですが、裁判の経緯を詳しく調べる一方で、娘のマリア・チェレステとの心温まる文通を紹介しています。

ガリレオは木星の衛星の発見などで有名ですが、ニュートン以前の近代科学の父と言っていい人です。しかし、なんと言っても有名なのは宗教裁判のことではないでしょうか。例の、「それでも地球は動く。」と言ったとか言わなかったとかいう話です。教皇ヨハネパウロ 2 世が宗教裁判の誤りを公式に認められたのは 1992 年のことでした。そんな 400 年も昔のことをいまさら、とも思いますが、少しずつでも過去の教会の過ちを認め、それを忘れるのではなく、十字架として、あるいは糧として新しい道を歩もう、というのが教皇様のお考えのようです。

さて、ガリレオは実は正式には結婚していなかったのですが、二人の娘と一人の息子がいました。ガリレオの家系は相当由緒あるものですが、奥さんは身分が大分低かったようで、当時は身分が余り違うと結婚はできなかったようです。一人息子はトスカナ大公に嫡出子として認められました。奥さんは後に正式に別の人と結婚するのですが、ガリレオはその二人を経済的に援助したりしています。

二人の娘は上がヴィルジーニア、下がリヴィアですが、二人とも後に修道院に入っています。どうしてガリレオが二人を修道院長に無理に頼んでまで入れてもらったかについては諸説あるようですが、正式な結婚で生まれたのではなかったので将来幸福な結婚はできないだろうと、ガリレオが危惧したのではないか、という説と、もう一つは娘がもの心ついた頃には、既にガリレオの出版したもの（『太陽黒点に関する手紙』など）が教会が支持してきた天動説に反するとして、教皇庁内の一部の保守派から攻撃されるようになっていて、そのため、将来を心配したガリレオが娘達を修道院に入れたのではないか、という説もあります。

いずれにしてもガリレオ自身は教会への忠誠を最後まで貫き、地動説は仮説である、という立場を取っていました。妹のリヴィア（シスター・アルカンジェラ）は、病気がちで修道生活では必ずしも充実した日々を過ごすことはなかったようです。それに対して、姉のシスターマリア・チェレステは大変聡明な女性で、修道院内でも信頼と尊敬を集めていて次の修道院長とも目されていたようです。ガリレオとの間に交わした多くの手紙が残っていて、この本のあちこちにちりばめられています。マリア・チェレステは少しでも父親の仕事の意味を理解しようとしていたようで、異端審問中も最後までガリレオを慰め、元気づけようとしているのが印象的です。ガリレオはマリア・チェレステの要請に応じて経済的に苦しい修道院をいろいろな形で援助し続けました。修道院に行って家具の修繕までしています。マリア・チェレステはガリレオを元気づけようとしていろいろ菓草やら、焼いたクッキーやらを送ったりもしています。

ガリレオは教皇庁内にも枢機卿など有力な友人・支持者がいて、出版に当たっては彼らの意見を聞いて異端審問聖省がクレームをつけるようなことがないように細心の注意をしていたようですが、最終的に問題とされたのは、1632年に

出版された『二大世界体系、プトレマイオス説とコペルニクス説に関する対話』または『対話』と呼ばれる著書です。裁判に至る経緯については省略しますが、強硬派はこの本を発禁処分にすると共に、ガリレオを異端の疑いで異端審問聖省に訴えました。フィレンツェのガリレオはローマから召還を受け、老年（56歳、当時としては老年）で健康に優れない体でローマに向かいました。あの時代ですから、何日も掛けて歩いていったのだと思います。この本では審問の過程が詳しく報告されています。結局、ローマでは敵意に満ちた異端審問聖省の枢機卿達によって有罪判決を受け、ガリレオの著書はすべて禁書になってしまいました。ガリレオはそのまま投獄される可能性もありましたが、何人かの強い嘆願によって投獄は免れ、自宅監禁の宣告を受けました。その間も、マリア・チェレステとの文通は続きましたが、彼女は判決の報を聞いて心を痛め、それが彼女の寿命を縮めたのではないかと、といわれています。ガリレオはシエナの司教ピッコロミーニの厚い庇護を受けてしばらくシエナに滞在し、そこでは落ち着いた思索の日々を送ったようでした。

マリア・チェレステはガリレオの早期帰還を願う一方で、当時フィレンツェに猛威をふるっていたペストが鎮静化するまでシエナに留まるように勧めています。当時のペストは町の人口の3分の1ほどを失うほどの脅威でしたが、修道女達は修道院という隔離された場所にいたためか死亡者はでなかったようです。

翌年、ガリレオが自宅に戻ってまもなく、そこからそれほど遠くない修道院で、あれほど父の帰宅を待ち望んでいたマリア・チェレステは病気のため亡くなりました。ガリレオのショックは大変なものだったようですが、ガリレオ自身は病弱な体でも研究心は衰えず、異端審問聖省との衝突を避けるために研究の方向を変えて落体の運動の問題を考えるようになったということです。

それにしてもガリレオの驚嘆すべき点は、現在では木星の衛星の発見などよりも、現代科学の基礎を築いたと評価されている落体に関する研究を、有罪判決以後に行っている事です。「ガリレオの娘」はガリレオについての一般的社会通念とは異なる新しい視点を与えてくれました。